

### 十三. 江戸時代は東西南は川に、北は野田堤に囲まれていた

江戸時代の庄内は四囲を堤で囲まれた輪中でした。島江村を除く庄内七ヶ村はその堤際に村落を形成していました。東を天竺川、西を猪名川、南を神崎川と接する庄内地方は標高が低かったため、南豊島各村と接する北側に堤を築き、南豊島各村から必要以上に農業用水が入ってくるのを防ぎました。当時の人々にとって、堤の修復、補強、井堰の修復、保全等は生活に密着した重要な問題だったのです。堤は洪水を防ぎますし、井堰の保全は農業用水の確保を約束してくれます。それ故、これらのことに心血をそそいで、たちむかったのです。庄内西小学校庄本門前に庄内南水門跡の石碑（写真）があります。これは庄内北側水路を流れてきた農業用水がこの水門を通過して猪名川へ流れ落ちるのです。

庄内の南西部の農民は屎船（こえぶね）で当庄内地方の名産「棕橋大根」や「まっか」等青物を積み、大阪天満で下屎（しもごえ）を汲ませてもらいかわりに、青物をその代価として置いていきました。このように、大阪に近かったためか、庄内地方は大阪の野菜供給地域として注目されることとなりました。また、江戸時代の中期頃まで庄本村や三屋村に地酒を造る酒造業者があったことが確認されています。



「庄内南水門跡」の石碑